

正宗白鳥

漱石と潤一郎



漱石と潤一郎



私は数年前、漱石の「道草」を読んで、その時の感想を、この文芸欄に寄稿したことがあった。この頃復たこの小説を通読したが、以前にまして感銘を得たように思われる。「道草」は、漱石の作中、唯一の自伝小説と云ってもいいもので、この小説と、彼れの日記と書翰集とによって、私は最もよく近代日本の一文豪の日常生活のさまざまな実相を察知したつもりになっている。日記や書翰集や自伝風の小説がその作者の真面目を知るに役立つ

つことは、あたり前のことで、今更云うに及ばないのであるが、今度、「道草」を読んで痛切に感じたのは、この文豪の実生活の如何に平凡無味であつたかと云うことである。物質に恵まれていないため、止むを得ず冴えない、萎けたような生活をするべく余儀なくされていたとも云われようが、それだけが原因ではあるまい。「道草」一篇を通じて現われている夫婦関係を伺い、夫婦の会話の一々を注意して読んでみると、数十年間、こういう会話を繰返し、こういう夫婦関係を続けるために、家庭をつくるのは、つくり甲斐のないことではあるまいかと、

私には思われた。これが社会の実相であり、我々も、「道草」に於て、おりおり自己の影を見、身につまされるのであるが、羨望の念は少しも起らない。漱石は、こういう実生活を営みながら、「草枕」に写されてあるような縹渺たる夢の世界を頭の中にだけ描いて楽しんでいたのであるが、私なんかには、「草枕」の世界がない。

実生活を離れて、詩の世界をつくって、作者自身が、その世界に於て一時の陶醉を試みるのは、所謂「遊び」と云うもので、あの頃、眞実尊重一てん張りの、野暮な自然主義者によつて、漱石が非難された所以であつた。

この種類の非難は、今日の文壇では通用しなくなっている。私は、このごろ、実生活を離れた創作をおりおり読んで、今の若き作者も、それ相応に夢の世界をつくりたがる心理を、漱石の昔の創作態度と連関して考えた。だが、ふわふわした夢の世界だけでは手頼りないものである。晩年の漱石は、苦しい現実を凝視した。東洋の文人気質を多分に持っていた彼れは、漢詩や俳句をひねくり、漢詩や俳句には、伝統的に、一つの済度し難いマンネリズムとして、悟りとか諦めとかの気持が現されたのだが、漱石の本心はどうであったか。（私は、漱石の詩碑が修

善寺に建てられた記事を読んで、詩にあらわれた漱石と、晩年の小説に現われた漱石との相違を考えた)

漱石は、俳句は勿論、漢詩でも日本人としては巧であったと思う。しかし、それは「遊び」であって、漱石の見た人生、或は漱石が自己の魂を据えていた現実とは、懸離れたものであったと思う。漱石は、現実を凝視したあと、或は現実苦を体験したあと、全心或は全身を「法悦」の境地、「自足」の境地と云ったような所に置いた人であったとは、私には思われない。

私は今、谷崎氏の「春琴抄」を読んで、漱石の小説な

どには現われていない世界を見た。ここには、現実がそのまま「法悦」の境地、「自足」の境地と化した人間心理が現われている。この小説を読みかけた時に、相かわらずの材料で、相かわらずの作風だと思ったが、読みつづけると、この作者若い時分のものに比べると、非常に深みが加わっている。奇を衒っているらしいところが却って真実に肉迫している。遊びが感ぜられない。現実と夢とが離れ離れになっているのではない。現実の世界すなわち夢の世界、夢の世界すなわち現実と化し、そこに心の充ち足った趣を呈するのだ。私は、ダンテの神曲

を連想した。「神曲」は「草枕」ではない。ダンテは現実の苦を嘗めながら、頭でだけ、ああいう世界を作って慰めていたのではない。彼れの描き彼れの唄った「地上樂園」は、彼れに取って夢であるとともに現実であった。「春琴抄」の佐助は、現実をそのまま夢とした。夢となった現実に、自己の心を据え身を置き、充ち足れる思いをした。「道草」の主人公などの経験し得られない境地である。私などの望んで達し得られない境地である。「春琴抄」の人物の心境を評して、「転瞬の間に外縁を断じ醜を美に回した禅機を賞し、達人の所為に庶幾ちかし」と、

或禪僧の云ったことが引用されているが、禪に対する知識を欠き、従って禪僧なんかは何等の敬意を有っていない私には、彼等の云う「達人」と、佐助の心とは、内容が全く異っているように思われる。





日本文学電子図書館

---

漱石と潤一郎

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第7巻、新潮社

昭和42年5月30日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館